

はげ 烈 (い) 1778^P 3318^P 3/4 Z
 3.319^P - 1/2
 高來の峯 凡世記 411^P 紀下 103^P 注 28
 おた 後やかえ 305^P 3137^P

うんせんだけ
 雲仙岳の噴火

西の口大倭国 (九州) に仏教が伝えらる

た年の翌年 (五五三) 五月一日から七日

へかけて、雲仙岳が噴火を起した模様であ

る。(一) 日本書紀 (二) 日本古典文学大系、岩

波書店、一〇三頁、注二八、三一参照

常日頃は波穏やかな有明海の沖に

あたかも浮んでいるかのように見える秀麗な

山口雲仙岳 (高來の峯) 風土記が、突然、

鳴動はしめた。

最初のうち震えるような響きか、靈妙

な日梵音 (仏教の樂) のように聞えてい

た。

ところか、その震響は雷の聲か

とも思えるばかりに烈くなつてゆく

光のような鋭い光が走った。それは、五月一

日の出来事であつた

耳を龍耳するはかりの大轟音が続いた

吉野車 ③3323⁷

2車区 ③3326-²/₂

紀下104⁰

3.319^D-²/₂

同文 ③3737⁰

と観察される。

＊

欽明紀十四年（五五三）五

月一日糸に爪へうられてゐる関連記事を一早くめ

見てみることにしよう。

7 夏五月の戊辰の朔に、河内国（金峯山西

麓の河内か）当する言さく。

日 泉郡の茅渚海（宇土半島の北側）有明海（か）の

中に、梵音す。震響、雷の聲の若し。光彩一

く晃り曜くこと日の色の如し。

欽明 天皇、心に異ひたまひて、溝辺

直を遣して、海に入りて求訪めしむ。

是の時に、溝辺直、海に入りて、果して樟

木の、海に浮ひて玲瓏くを見つ。遂に取りて

天皇に献る。

畫工に命じて、佛像二軀を造らしめたまひ

今の吉野寺に、光を放ちます樟の像なり

とある。

＊

三ノ上 891

和泉 112

3,320

次頁から

■ 次のように考えてみたい。

● 五月一日 雲仙岳の対岸にあたる河内

（金峯山の西麓にあって有明海に面しており

雲仙岳が周近に見える）が、早馬を駈けて申

し上げた。有明海

茅渟海（有明海の古名だったのかも知れな

い）の中に聳える高來の峯（雲仙岳）が

火を噴きあげております

● その日、欽明天皇は、状況を視察する為

朝臣達を従え和泉国に相当する宇土半島

あたりへ行幸された。どうだろうか。

の基部北岸

八響 小林にちれ
はちおん 八音 180P
長井 134P

ほうと 名
浄土 1103P
信託 1147P
花の付く 1725P

おくえ
僊

3,321

十万億土
元 87780P
相乗浄土
金 319P

紀下10K
前23 11作

火柱 1885P

5626.22(5)

元 875P
朔月 = 1月のこと

前頁 14

● 陽が沈み、朔月の曙が色濃くあたりを包み
込んだというのに、茅瑯海の上空だけが異様
なまでに明るかった。
● 真赤な灼熱の火焰が、天穹の一点を焼き焦
かさんばかりに、赫赫と燃え盛っているのだ
った。
● 火柱は、美しく、光彩しく晃り曜いて、ま
るで日の色のようにであった。
● 欽明天皇は、その様子を見て、心の内に異
し、ま水た。
● 西方十万億土を経たところにあるという極
楽浄土の尊い仏の姿が、――その火焰光背の
中に、まばゆく見えたような気がしておい
て、だったのかも知れない。
● 米なお、聖徳太子建立になる四天王寺が西
を特に重視して、いるところを見ると、かなり
早くから、極楽浄土は西方にあるという信仰が
根付いていったものと思われる。
● その時、
へ如来の八響の妙音

かん 1719P
漢ハッ 2433P
八響 大ハッ 呉カウ

ともおぼしき不思議な音が、大気をふるわせながら西の方から聞えてきた。

我聞仙音聲
聖德太子
龜井勝一郎

日本ソノサヒニター、一三四頁参照

大宮人達は、有難い仙の御心を思い我知ら

お両手を合わせ伏し拝んでいた。

高
く
ひ
く
く
経
文
を
唱
え
る
稻
目
の
声
が
、
波
の

彼方へと流れていった

●そんな折
茅瑯海（有明海の古名か）の海中

何やら光るものか見えた

天皇は
いよいよ
胸の内に
要しまし
溝辺直

といふ者を遣し、海に入りて求訪めせられ

敏達紀十三年是歲条の地直氷田のミと

であらうとい
う。
~~が、父の腹縁にあるのだからと考~~
~~えてみ~~

溝
辺
直
が
火
の
山
の
方
へ
向
か
つ
て
漕
ぎ
進
ん
で
ゆ

く
と
果
て
—
—
—
—
燐
燐
と
燃
え
る
火
焰
に
照
ら
れ

波間に輝いているものがあつた。
それは海に浮

んで漂って
いる樟木であ
った。

溝辺直は、その樟木を取って、欽明天皇に

た ま っ た

3328^{1/2}

書紀集解 紀下5頁 此の821

3,323^P

3319^P → 562.6.4(水) 紀下104^P 日本書紀 686^P
-2/2 3321^P 注7 3326^P にも同文

岳の噴火が続いたのかも知れない (第六十五章)

岩波書店、一〇三頁注二八参照

という。日本書紀(下)日本古典文学大系、

辰(七日)に改めている (河村秀根著)

上の誤りか。書紀集解は、暦考により、壬戌朔戊

「此年の五月朔は戊辰ではない。書紀編纂者

「か」なから、

と記されている。

郡の茅渟海の中に、梵音す。云々

夏五月の戊辰の朔に、河内国言さく、泉

欽明紀十四年五月一日糸の冒頭には

米

・欽明天皇は、画工に命じ、
うせになった。これが今、吉野寺に光を放つ
ている樟の像である。
仙像二軀を造

雲仙岳の噴火の歴史の項参照

紀下104^P 5丁 3319^P 32 179 62庫部 3体 3326^P 64 3329^P 64

H4.10.21(金)

小林 3684

3.324
1669 1674 1668 1659 1648 1637 1627 1616 1605 1594 1583 1572 1561 1550 1539 1528 1517 1506 1495 1484 1473 1462 1451 1440 1429 1418 1407 1396 1385 1374 1363 1352 1341 1330 1319 1308 1297 1286 1275 1264 1253 1242 1231 1220 1209 1198 1187 1176 1165 1154 1143 1132 1121 1110 1099 1088 1077 1066 1055 1044 1033 1022 1011 1000 989 978 967 956 945 934 923 912 901 890 879 868 857 846 835 824 813 802 791 780 769 758 747 736 725 714 703 692 681 670 659 648 637 626 615 604 593 582 571 560 549 538 527 516 505 494 483 472 461 450 439 428 417 406 395 384 373 362 351 340 329 318 307 296 285 274 263 252 241 230 219 208 197 186 175 164 153 142 131 120 109 98 87 76 65 54 43 32 21 10 0

3313-2/4
3333-2/2

なるほど、定かならないことではある。

と云うで、雲仙岳は、欽明朝のみならず、

敏達朝にも噴火したのではなからうか。

日本霊異記(上)第五話に、ほぼ同様の話

がみえ、敏達朝のことであつたとする。

敏達天皇の御代、和泉国の海中に樂器の

音声が有つて、笛、箏、琴、瑟、篳篥等の

いや、或いは雷が振動してゐるようでもあ

つた。昼は鳴り、夜は耀き、東へつまり肥後国

の方角を指して流れた。

敏達天皇の皇后(後の推古天皇)は、大部

屋栖古という者に、「汝往きて看よ」とお

いやつた。

敏達皇后は、大伴屋栖古に、「海に入つて

探してみよ」とお命じになつたのであろう。

*なお、大伴屋栖古は、大伴屋栖古と同一である

という。(「日本霊異記」日本古典文学大系、

諸処方々探し続けた。しかし、根の無い海草以外に何か漂ってはいようか。
 ・とはいえ、何ら得るところなく、おめおめ帰ることも出来なかった。
 ・大部屋栖古は、自分の所領地である、
 三津の浜辺に、(万巻七十一一五)へと船を漕ぎ寄せ、村人達に尋ねたのだらう。
 ・「そーしてついに、
 一六六に相当するところ、
 宇土半島北岸のどこかで、
 を得たものと思われるで、
 ・大部屋栖古は、
 還り上ると、
 奏上し、
 了。
 上へ上へ上へ、
 欽明天皇の御世に、
 海に浮かび、
 いる樟木を得たと聞いておられますか、
 ・「まことに聞きしが如く、
 雷に撃たれた楠が、
 高脚の浜に流れついておりました。今、
 古伏してお願ひ申し上げます。願わくは、
 の楠で、
 仏像を造らせたいだけとう存じま

二

と
特筆

日本霊異記 81
前頁 155

3,326^P - 1/2

みだりな人、日本霊異記 81 池田直永田 へある
弥陀三尊 925 紀下 148 池田直永田 (いけのあたひひた)
向原寺 3317^P - 75 勢至 1221^P

同様のことかあったの	と記されているところを見ると、これ以前に	「聞きか如く」	とあつて、特に注目される。	有り	實に聞きか如く、霹靂（落雷）に當りし梅	（敏達皇后の）詔を奉りて往きて看るに	なにお、ここに、	岩波書店、ハ一し八五頁参照	という。ハ「日本霊異記」日本古典文学大系	阿彌陀の像、是れなり。云々、	・今の世、吉野の比蘇寺に安置して光を放つ	ともいうに安置した。蘇我稲目が創建した	陀三尊）を雕らせ、豊浦堂（向原寺・桜井寺	薩三軀（伝承では、阿彌陀・觀音・勢至の彌	・大臣蘇我馬子もまた喜び、池田直永田に菩	我馬子に詔命を伝えた。	と仰せられた。	願所に依る宣し
------------	----------------------	---------	---------------	----	---------------------	--------------------	----------	---------------	----------------------	----------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------------	---------	---------

日本霊異記 83 257

日本 83 357
う 請 73
カ 27
2071

よろお 元
装う 2284^p

3.326^p - 3/2

3319^p - 2/2
欽明紀
14年5月10

3319^p - 2/2 172 軀
3326^p - 1/2 173 軀

■ともあれ、

① 欽明朝および敏達朝に、日雲仙岳に噴火

② その度毎に、日樟木に(楠)を海中に得て、

敏達朝に(三軀)を造った、
その木から仏像(欽明朝に二軀)

というところなるのであろう、と想到される。

■とすれば、察するところ、日本書紀にの

編纂者達は、

① 欽明・敏達両朝のよく似た二つの話を合体

させ、あたかも一つの出来事であるかのよう

に装ったか、

② もしくは、敏達朝の出来事を全く省いてし

まったか、

そのどちらかなのであろう、と思われぬ。

*

日本書紀83末
新収由3575-55

3.327-1/3
大697.235
エタミ 割替ム
P

梅檀 名 藤原(伝暦)287
12/10
427.05

今昔1-16

参考までに述べると、均等
(1) 日 今昔物語 (建現光寺安置靈仏語第二十
三) にも、「敏達天皇の御代」のこととする
ほぼ同様の内容の記述がある。
(口) さらに「聖徳太子伝暦」(推古三年三月条)
には、
「土佐南海」夜有大光。亦有聲如雷。土
佐の南海の桜島あるいは阿蘇山が噴火したの
であらうか。 (中略) 故釋梵感徳下漂送此
木(梅檀)。即有勅下命百濟工刻造檀像。作
觀音菩薩。菩薩、高数尺、安吉野比蘇寺。
時時放光。と記されていいる。
(い) また、日本書紀記(上)第五話によると、
「推古元年四月十日、厩戸皇子(聖徳太子)
は、大伴屋廬古の連の公を以て、太子の肺脯
の侍者(大切な補佐官)にされた」とい
う。
こうして、「吉野寺」(比蘇寺)は

日本社寺 686 吉野の比蘇寺 日本書紀 83 3.327-2/3 ほとん 云 P 3319-2/2 欽明朝の吉野寺 日本社寺 686 殆ど 2046 ⑤ 3326-1/2 敏達 吉野の比蘇寺 日本書紀 83 2/3 23 盡 33679

尊崇そのんすうされたようであるか、
其の

後盛衰常ならず、現今では古建築が殆ど盡き

ゆわかに礎石を残すのみという。(「日本社

寺大観」名著刊行会、へ世尊寺(比蘇寺)✓

参照)

① なお、

へ欽明・敏達朝当時の「吉野寺」は、肥後

国の緑川南岸にあつたのではなからうか✓

と想像される。

② 一方、大和国にも、用明天皇の御世に「吉

野寺」が創建されたようである。

「吉野寺は、今の吉野郡大淀町比曾にあつ

て、別名比蘇寺・現光寺・世尊寺ともいう。

用明朝に、聖徳太子勅を奉いて造立し給ふ所

という

とある。(「日本社寺大観」名著刊行会、へ世

尊寺✓参照)

③ ところか、聖徳太子への金人の夢告の後、

肥後国の「吉野寺」は廢絶の止むなきに

至つたのであろう。

3,327⁰ - 3/3

天
改
行

④ そーて、大和国^{やまとのくに}の吉野寺^{よしのでら}も、いつしか
衰退^{すいたい}していったようである。

⑤ こうしたわけで、

大和国^{やまとのくに}の吉野寺^{よしのでら}（比蘇寺^{ひそでら}）の礎石^{いそせき}が

現在^{げんざい}に残^{のこ}されてい^るだけとな^ってしま^った[✓]
と解^かされる。

*

③3319^P

③3323^P 3.328^P-1/2

ない。

と述べるに、あるいは怪訝に思われるかも知れ

敏達朝にも噴火したのであらう。

へその雲仙岳か、
欽明朝のみならず

は実に穏やかな山である。

■雲仙岳は、活火山であるとはいえ、ふだん

雲仙岳の噴火の歴史

1792
-1663
129年後

562.6.25(本) 小林 煙=煙 604.610^P 大日本地震史料ニシテ445^P
電島原大要肥後半惑 1792年 3.328^P-3/2
かいほう 568^P 津波 煙 漸く たいだん 1612^P 煙 小林 604.610^P 大日本地震史料ニシテ445^P
ふ 447^P 458^P 62.2.24(日)

一、かし、寛文三年(一六六三) および寛政四年(一七九二)に雲仙岳が噴火したと記録され、折噴火する火山だ。編、思文閣、二五八頁、四四五頁等参照) 特、此山の劇烈な噴出は寛政四年正月十八日に始まった。普賢岳鳴動、泥土を噴き出し、二月四日より三會村の穴迫谷崩壊して煙を吐き、次いで二月二十九日に蜂窪の地から噴煙が立ち、早、始め、鳴動次第に強く、夜間峯頭に火焔を望むに至った。穴迫火気、日々に熾にして、次第に谷中へ焼け降り、民家近く、にまでも迫っていった。三月一日より地震漸く(だんだん)強く、四月一日には前山が崩裂し、泥水奔流して海に入り、海嘯(地震等によつて起った大海の激しい津波)に水に加わり、島原城下数十村を蕩盡(あらいつくすこと)した。肥後国熊本、海辺も其害を被った。島原の死者一万五千人、肥後国の死者五千人に及んだといふ。『大日本地震史料』四四五頁、『帝国地名辞典』太田為三郎、名著出版、二四〇頁へ温泉(矢野照)

H4.10.22 (木)
H11.7.4 (日)
H28.4.15 (金)

3,329^P

Spillo
3,329^P

主おもえ
記憶 5/3[↑]
火事 854^P

主おもえ
記憶 5/3[↑]

参照)

■そして近年では、平成二年（一九九〇）十

一月十七日に、雲仙の普賢岳（一、三九九〇）十

から噴煙が上がり、土石が十二十メートルの高さ

まで噴出し、硫黄のにおいがたちこめたのだ

った。（「朝日新聞」平成二年十一月十七日

二十四日付参照）

この時の土石流の災害は、記憶に鮮烈である。

*

成り上がり
ダブリ

7

報

H30(2018)8.25(土)~8.26(4回)
 H31(2019)3.17(日)~3.18(3回)
 令和元(2019)8.20(火)~8.21(3回)
 令和2(2020)4.1(水)~4.3(4回)
 令和2(2020)12.30(火)~

3,330^P - 2/2

ようてあ 紀下119^P
 前頁中 紀下122^F 4H
 ③3345^P - 3/3
 ④紀下119^P 注21

11F/1
 12/31

とはいえこの軍も、約半年後の欽明二十三年(五六二)七月以降に、潰滅してしまっただよ
 うである。(欽明二十三年正月条。同年七月条。『日本書紀』(F)日本古典文学大系、岩波書店、一一九頁注二一。同五五一頁補注一
 ハー一三参照)

*

⑦ 2841

同文 紀上 2839
③ 3839^D 4277 1824

天行
改行

⑦ 2841⁰

天作行

周行天下

すでに水へた通り

天照大神は、皇孫瓊瓊杵尊に

私自身を拝み、この鏡こそ、ひたすらに私の御魂として

お仕えせよ
と仰せられ
ハ坂瓊曲玉
をまきつけ

二種の神宝をお授けになった。
た日ハ咫鏡と日天叢雲劔(草薙劔)の

② 倭国(ヤマト)の都を後にして、東の瓊瓊杵尊(ニギハヤヒ)は、天上の

日 日 辺 日 本 国 乃 (近畿) へ 下 っ て 中 か 水 た、
と 推 察 さ れ る 。 (第 四 十 八 章 へ 天 孫 降 臨 ✓ の

頃ころにおいて既にすで述しよつべし。第1表によると、三九九と四二七年頃ころに、恐らく、仁徳朝当時にんとくてうとうじに、

西の曰大倭国(九州)の古京には、
天照大神の御魂が祭られており、
の殿の内

●東の日本国に、
日刀月本國に、
天叢雲劍と、
加安置され、
八咫

ということなの
であろう。
(第1! 47表参照)

3059-2/14 8~9行に合わせ
 3058-44 3059-2/11 3.331-2/5 3.059-2/11
 3059-5 2/13 3059-2/11 3059-2/11
 3059-2/11 3059-2/11 3059-2/11

次頁から

雄略天皇の御代の四七八年
 西の曰大倭国に（九州）の曰内宮に（天照大神の宮）の近傍に、曰外宮に（豊受大神の宮）が建てられたものである。（第47表参照）
 曰太神宮諸雜事記にの雄略天皇条から推しはかるとで
 二年（四七八年）の七月七日、
 天上の国（九州）の天照大神（内宮の祭神）のすぐ近くに、豊受大神（外宮の祭神）を迎え奉った
 と解される。（第47表参照）
 なお、曰豊受神に（食津神）が中国の曰倭のことにあったからこそ、中国（北魏）の曰太和（大和）という年号が用いられてゐるのであらう、と想到される。（第五十五章へ豊受大神の項において既述）

その後

3332-1/6
 外宮に

天照大神の御託宣通り

延びて次頁

5ようそ
重祚 1455

タイトル
3078

3.331^P-3/5

3081^P
3/5

版(3079)
こと 3331^P-1/5 21行
4277行 21行 149行

前頁

また、雄略天皇の遺詔に、
「迎える」こととなり、
「新」たな誕生する天子の璽符と、
「鏡」と「剣」とが、更に造られたのであろう。
「う」
「と」思わゆる。
「つ」つまり、継体天皇が即位された当時、
「東」の「清寧」天皇の都には、
「天」叢雲剣と「草薙」剣とが安置されて
おり、
「西」の「継体」天皇の都には、更に造られた
「鏡」と「剣」とが安置された、
と想像される。(第五十六章へ更に造られた
神璽の項において既述)
「と」ころか、第一期二朝時代が破綻した後、
第二期二朝時代の東の天子として重祚された
「神武」天皇(後期継体天皇)は、
二朝時代を廃止しようとして、
決意された。

「と」次頁119

41111
③3260^{P-6/6}

3.331^{P-4/5}

③3260^{P-6/6}
1751~

同文
③3252^{P-4/6}
③3251^{P-1/4}天つき改行

③3252^{P-2/6} 85行

へ天照大神（八咫鏡）と天叢雲剣には、豊
鍬入姫命をお付けになり、倭（大和）の笠縫
邑（田原本町新木か）に於てお祭りになつた
と想察される。（第六十五章へ笠縫邑・穴磯
邑）の項において既述）
とはいえ、二朝時代を廃絶した数年の後
再興の二朝時代が再興されることになり、
へ二朝時代を復活させることとなり、笠縫邑に
祭られていた日八咫鏡と日天叢雲剣の二
つの神霊のうち、日天叢雲剣のみを東の
天子（綏靖天皇）の大殿の内へ移して安置し
た
と考えてみたい。（第六十五章へ綏靖天皇即位
の項において既述）
なるほど定かでないことではあるが、
もそういう経過があつたものならば、
綏靖天皇即位当時「欽明朝の前半当時」
①西の「大倭国」（九州）の天照大神の宮
迄の「三年間の空位期間」について

3362 3377-3 3.332-1/6 3377-3 3.332-1/6 3377-3 3.332-1/6
 北伊勢大神 倭姫命世紀 2234 紀上213 92

利の下都磐根に大宮柱廣敷立天、輝き渡った
 のであらう。(倭姫命世紀) 垂仁二十五年(参考)

倭姫命世紀 (垂仁十四年) 次鈴鹿奈具波志忍山

年奉斎は于時國造大若子命 (一名大幡主命) 又國造建

参相、御共仕奉。國內風俗令白。又國造建

日方命参相。我國名何問給。答白。又國造建

伊勢國。此と白。度村大字。多度神社 (祭神多度神は)

一に天津彦根命なりと云ふ。は。俗に、北伊勢大神宮と呼ばれている

という。(日本社寺大観) 名著刊行会、多度神社

第423 図参照) 北伊勢の地形は どう見ても

宇佐あたりの様子と違ふ。天照大神 (八咫鏡) は

13.5 M 宇佐の地形に似た所。山中の

を求めて、北伊勢から、南伊勢、龍原宮

(別名、多気大神宮とも、磯宮ともいうので

地名辞典 939^p 志都の村 地名辞典 龍原 渡会郡の村 龍原神社がある
 三全果地図 24所 伊勢神宮 榊井勝元 248^p 院原宮は、南伊勢 3332^p 4/6
 地名辞典 龍原 渡会郡の村 龍原神社がある 939^p (皇太神宮の別宮)

たけの 多気 大神宮 3378^p 3/10所

3382^p 2/6

あろうへお遷りになつたと思われる。第
 428 図へ龍原宮近傍図へ第429 図へ馬城峯近傍
 図へ参照へ
 ・但し「現時点では」
 へ龍原宮の別名か、多気大神宮で
 ある
 と明言できない。
 ・とはいえ「続紀」文武二年十二月二十九
 日条の下
 「多気大神宮を度会郡に遷す」
 という記事を下
 今、龍原宮の地から「度会郡(の平野部)へ遷した」
 とみる説がある。「日本書紀」(上)山波書店、昭和四十三年六月十日
 (2刷)発行、五九頁補注六「続日本紀」(一)新日本古
 典文学大系、岩波書店、一九八九年三月二〇
 日発行、一五、二七四頁補注一一〇一八多
 気大神宮へ参照へ要検討へ
 水尚「南伊勢山中の龍原宮」は、今の多気郡の区域から
 ほんの少し東側の所に鎮座しているが、もと多気郡にあった
 という。「日本書紀」(上)山波書店、昭和四十四年六月一日(2刷)発行、五九頁参照
 *また「多気」という地名は三重県内に複数ありある。

3333^{1-1/2}
なお 極めて意外なことが
こ

記(本) 237⁰ 3384⁰
(墨) 90⁰ - 34⁰
伊勢神宮 34⁰
3,332^{1-5/6}
1977

3383⁰
続紀(本) ①-15⁰
続紀(白) ①-7⁰
3382⁰ 3368⁰ 3363⁰ 3382⁰
3333⁰ 3333⁰ 3333⁰ 3333⁰

あううへへお遷りになったと思われ。
第 四 龍原宮近傍 四 参照
また、続日本紀、文武二年(六九八)十二
月二十九日条には、
「多気大神宮を度会郡へ遷す」
とある。
・ともあれ、詳らかでないが、龍原宮(多気大神宮)
へ天照大神の口外宮(離宮)は、北伊勢
から、南伊勢山中のへ遷され、文武二年に
現在の度会郡の口外宮の地へ移されたであろう
と解釈してみたい(第 3332 476 表参照)
もつとも、こんからかってまいそうだ
か、古事記(天孫降臨条)には、
「登由宇氣神、此者坐外宮え度相神者也」
と記されている。
・従って、古事記によれば、豊受神である
という口外宮の祭神は、豊受神である。
※つまり口外宮の祭神は、【天照大神】なのか【豊受神】なのか
分からないわけである。
・何とも理解しにくい。
・いかしともあれ、ここに、特筆すべきこと
がある。

3.332^{P-6/6}

延喜寺3059^{P-2/11}
1字アキ

延喜寺3384^{P-1/4}

延喜神名式の伊勢国度会郡の条に、

①内宮は大神宮、

②外宮は度会宮、

と記されている

である。

「日本書紀」(日本古典文学大系、岩波書店、二七〇頁) 注一五参照

恐らく、

①伊弉冉(宇佐国)の天照大神の宮は、

大神宮(内宮)

②南伊勢の瀬原宮(多気大神宮)なら

びに度会郡の平野部へ遷された当初(天照大神の

宮は、)外宮(離宮)

のころの

第(表参照)

と呼ばれていたの、と推察される。

では、

(1)外宮(離宮)が、現在のようになら

宮と称されるようになったのは、

時だっただろうか。

(2)また、外宮(離宮)に祭られていた

天照大神(八咫鏡)が現在の内宮へ移され

外宮に豊受大神を迎えた経緯に

ついては、どう考えたらよいのだろうか、

といった疑問が湧く。

3059P-7/11 ③3361-3/19 極めて難
 ③3393, 3396 JK05 3.333-1/3

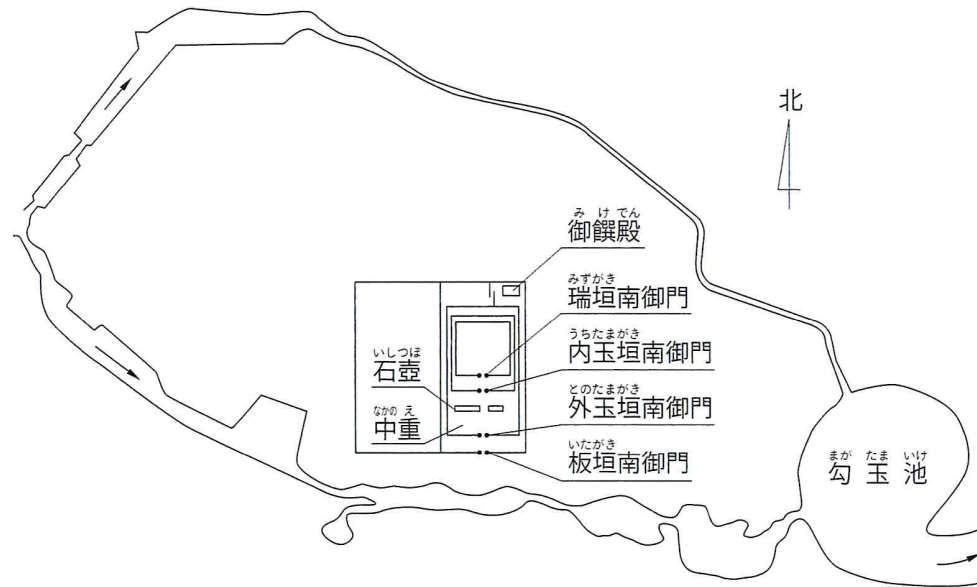
「神宮」ハンブルグ 26ページ ③3407 同又
 同 ③3407 ③3408 ③3405-3/5
 ③332-4/5 非常に重要である
 ③3407 同又 ③3408 ③3405-3/5
 ③3407 ③3408 ③3405-3/5
 ③3407 ③3408 ③3405-3/5

な お く 意 外 な こ と な が ら
 (当初) 度会の大神主は、天照大御神を
 外宮において朝夕お祭りしていたのであ
 るが、そこに天照大御神の御食神(豊受神)
 を新らためてお迎えしたとい
 現在の日外宮には、正殿に豊受神を祭って
 おり、御垣内の東北隅に設けられた御饌殿
 で天照大御神をお祭りしている
 という。(伊勢神宮) 榎井勝彦、学生社
 三七し三九頁参照) 四頁四版7へ御饌殿
 ※この伝承は非常に重要である。

*

3,333^P 2/3

- ・『新やまと物語』(1) 160頁 第21図をコピー、
右頁の全面に大きく掲載下さい。
(決して、新しく作図しないで下さい)



(第21図と同一)

1409 第21図 伊勢神宮〔度会郡の外宮〕

1309 『伊勢神宮』桜井勝之進、学生社、40頁。

1209

『神宮』神宮司廳、36頁参照。

- ・洛陽宮城の外周を流れる「穀水」と「陽渠水」が、思い起こされる。
- ・第22図に示す「宇佐嶋」(亀山の内宮)を模倣し、伊勢神宮の『外宮』(離宮)も島状とされたのではなかろうか。(第9表参照)
- [*双方の島の輪郭が、よく似ているように思われる]

同図「新や」(1)~160^P

④ 3361^P~4/4 宇佐神宮の図

江ノ戸中 3324? 45P 3059 3333-3/3 44.11.9 昭和19年 振込 1966P

天つぎ 改行 止由美 3333-3/3 45P 3059 3333-3/3 44.11.9 昭和19年 振込 1966P

ところ、外宮と書いて今はゲクウと
読んでゐるが、古訓ではトツミヤである。
国学者賀茂真淵は、天皇の離宮を万葉集
ではトツミヤと読んでゐることに注意を向け
「伊勢のトツミヤは、皇大神宮内宮の
離宮にあたる宮である」
と解釈したのである。
賀茂真淵
また、本居宣長は、師の説を絶賛し、
「豊受大神を迎える以前から、外宮は（離
宮）は存在したのである」
と書いてゐる。（「伊勢神宮」桜井勝彦進、
学生社、三三頁参照）
観察するところ、
豊受大神を迎える以前において、
伊勢国の外宮は（離宮）で、
天照大神をお
祭りしてゐた。
豊受大神を伊勢国の外宮にお
迎へてから後は、トツミヤになつた
といふことなのであうと思ふ。

通常